

準備号

首都大学東京 社会福祉学分野 ニュースレター

2015.11.21.saturday

首都大学東京 社会福祉学分野 ニュースレター



ニュースレター創刊

このたび、首都大学東京（旧・東京都立大学）の社会福祉学分野のニュースレターを創刊することになりました。このニュースレターは、社会福祉学分野の取り組みを発信するとともに、現役の学生と院生の活動報告に加え、卒業生や教員の活動について情報を発信する場として、年に2回発行する予定です。

ご覧の通り、今号は「準備号」として試験的に発行するに至りました。タイトルを「ニュースレター」とありきたりなものにしましたが、より良いタイトル案がありましたら、是非ご提案ください。首都大学東京が培ってきた社会福祉学分野の教育と研究の歴史を反映する素敵なタイトル案をお待ち致します。

Table of Contents

ニュースレター創刊・・・1

【学生の声】
「自分とは何で、どこへ向かうべきか」
高田 昂・・・1

【教員の紹介】
「8か月目に思うこと」
阿部 彩・・・2

編集後記・・・2

学生の声 Students Voices

自分とは何で、どこへ向かうべきか

学部4年 高田 昂

この一か月は、「手紙 ～拝啓 十五の君へ～」を聴きながら「自分とは何で、どこへ向かうべきか」問うてきた就活戦線でした。その中で、私は、一人の人間（もしくは集団）の自己決定を尊重できるソーシャルワーカーになりたいと考えるようになりました。バイスティックの「自己決定の原則」にあるように、ソーシャルワーカーは権利を擁護する立場である為、権利を持っている（べき）人や集団の自己決定が大事です。バイスティックの7原則の中で、そこが一番気になったのです。当たり前な事かもしれませんが、自己決定をして頂く支援というのは当たり前でなければいけない事なのでしょう、恐らく。

しかし、本当に自己決定を促すことができるのか私は不安になります。お互いがお互いに影響し合うのがコミュニケーションですが、私が支援することになった人の決定が、実は自己決定ではなく私の洗脳による決定であるとしたら、とても恐ろしいことです。逆に「一から百までこれはあなた一人で決めるものです」とその人に抱え込ませることも、権利擁護にはならない場合がある気がします。また、自己決定自体の難しさもあります。例えば、取得単位数が厳しい中で、本当に大学を卒業しようとするのか、しないのか、私にとってそれを決めることは難しく、骨の折れるものでした。自己決定をするということ自体が尊いものなのでしょう。

だからこそ私は、本人の自己決定を尊重できるソーシャルワーカーになりたいです。私を与える影響についてしっかりと意識し、本人が自己決定をする環境を作ったり、そうした環境を本人が作れるようなサポートを丁寧に行いたい。本人の「自分とは何で、どこへ向かうべきか」問う作業を尊重したい、そう強く強く思いました。



教員の紹介 a New Member



8か月目に思うこと

教授 阿部 彩



早いもので、もう11月。4月に首都大学東京に赴任してから8か月がたった。月並みな表現だが、「本当に早かった」。

当初、私は教壇に立つのが怖かった。なんせ、相手は成人式を迎えてもいないようなワコウド（若人）である。私がそれまで16年間務めた研究所では、40歳の研究員が「若手」と呼ばれるような年齢構成の組織だった。みな、博士号をとってから研究所に入所してくるのだから当たり前だが、ちょっと髪の毛が薄くなってきて、お腹も出てきた男性研究員を「〇〇君、ちょっとこれやってくれる」と新人みたいに話しかけるのは、他者がみたら異様かも知れない。

比べて、教壇からみる顔は、ホンモノの「若者」である。初々しいが、コワい。何で、「コワい」のか。若者は正直で、単刀直入。悪く言えば、ずうずうしい。私はこれまでもたくさんの講演をこなしてきたが、そこでは、聴衆は少なくとも私の話を聞きたくて講演に来ている。話が終わると、握手をもとめて並んだりしてくれる。・・・しかし、講義を聴いている学生は、そんなわけにはいかない。内容がおもしろくなければ、すぐ寝る。細かいところをごまかせば、突っ込みの質問をする。講義が終われば、挨拶もなしに消えていく。来ていく服装やししゃべり方もすごく気に入った。「ださいババア」と思われたらどうしよう。きりっとスーツ着て決めなくちゃ、と気を張ったもんである。

しかし、この原稿を書くために、自分の毎日を振り返ると、「あ、なんか、この頃、楽しい毎日だな」と気が付いた。いつのまにか、緊張の毎日が楽しい毎日にかわっていた。卒業論文や基礎ゼミを担当するようになり、学生の顔を覚えてきたこともあるだろう。廊下を歩けば、「阿部先生、こんにちは」と挨拶をしてくれる学生も出てきた。講義は今でも「コワい」が、寝ている学生を見ても落ち込むことはなくなってきた。学生のリアクションを楽しむ余裕も（時々ではあるが）出てきた。

大学正面の銀杏並木は、今、紅葉の盛りである。秋の透き通る青い空を背景に、真っ黄色の巨大な炎がくっきりとそびえ立つ。ヘンな岩石のオブジェがある中庭には、学生たちがお弁当を食べたり、寝転んでいたりする。私は、このスペースが大好きである。毎朝、南大沢駅から大学への階段を駆け上がるたび、私は首都大学に転職したことをうれしく思う。そして、今日もどうやって学生たちと付き合っていこう・・・と思いを巡らすのである。



編集後記

たった2ページのニュースレターですが、学部4年生の高田昂さんと、4月に本学に着任された阿部彩先生にご寄稿いただき、準備号を無事発行できたことを誇りに思います。どちらの文章もなかなか読み応えがあります。

2016年4月発行予定の第1号では同窓会の様子や今年12月に着任予定の助教のご紹介なども検討しています。現役学生・院生はもちろん、卒業生からのご寄稿も歓迎しますので、事務局までご連絡ください。